II　分業の動態的メカニズム

——スミス『国富論』冒頭4章の再検討——

西部　忠

ハイエクの分知論からスミスの分業論へ

オーストリア学派のハイエク，カーズナー，ラヴォアらは，市場を諸個人が分散的に持っている知識を発見・伝達するためのシステムであると主張している（Hayek，1937，1945，1946，1968；Kirzner，1985，1989，1992；Lavoie，1985，1986a，1986b）．私は，知識の分業体系（分知体系）として市場を理解するという基本的観点に同意しつつも，企業家が機敏性に基づいて〈無知〉を発見することを通じて不均衡が均衡化されるというカーズナーの議論の一面性を批判して，市場は〈無知〉を発見するのみならず，暗黙知や新技術などの〈未知〉を創造する機能をも持つと論じてきた（西部，1996, 1998a, 1998b）．確かに，こうした市場＝分知体系論は，市場の知識論的あるいは情報論的な機能を説明するためには一定の有効性を持つ．しかし，他方で，それは重要な問題を見落としてもいる．

知識や情報は，オーストリア学派が論じるように，市場内部においてのみ創造・発見・伝達・蓄積されるものではない．それらは，物的生産物と同じく，労働や生産や科学的研究といった人間の主体的な実践活動の場において初めて生産／再生産され，伝達され蓄積されうる．つまり，知識や情報は，市場以外の組織や集団，なかでも特に，企業内部の労働過程や生産過程においても創造・発見・伝達・蓄積されているわけである．より一般的にいって，オーストリア学派は，市場過程以外の場における人間活動が知識の固有な性質を形成するということを軽視する．あるいは，ミーゼスにおけるように，あらゆる人間活動を市場における合理的な人間行為とそれが織りなす競争過程へと還元して理解することが可能だと考えているといってもよい．かりにあらゆる人間活動が合

理的であり，それが帰結する社会的過程が競争的であるならば，このような仮定も許されるであろう．しかし，それはGNUやLinuxなどのフリーソフトウェアがインターネット上での協力や協働を通じて開発され，それらが商用ソフトウェアと比べてみても高い品質を誇っているという事実を見ても正しいとはいえまい[1]．やはり知識や情報を市場や競争との関連においてのみ考える見方は狭すぎるといわざるをえないのである．

私は，こうしたオーストリア学派の限界を認識する中で，今後の研究のための作業仮説ともいうべき次のような諸命題に到達した．

1）分業は，市場での「社会内分業」に限られるものではなく，工場や企業の内部での分業，いわゆる「作業場内分業」をも含む．

2）生産過程には広範に「協業」と「作業場内分業」が存在しており，そこでは「競争」のみならず「協力」や「共同」という要因が強く働き，それらが知識や情報の創造・伝達・蓄積を強く推進している．

3）生産と労働には「技能や熟練」が必要とされるが，それらにかんする知識はしばしば「暗黙的」な性質を帯びており，市場において伝達されるような明示的に形式化された情報，すなわちデータには翻訳されにくい．

4）そうした技能や熟練にかんする知識の創造・伝達・蓄積は，むしろ協同的関係における懇親的な（マイケル・ポランニーがいうコンヴィヴィアントな）関係におけるコミットメントにより促進される(M. Polanyi, 1958)．

「分業」は，知識と労働の動的な相互関係を理論的に考察するための適切な場面である．マルクスは，分業を「社会内分業」と「作業場内分業」の二つに分類したが，スミスにはそのような用語による区別は存在しない．そしてまた，ハイエクらオーストリア学派もこのような区分をしていない．なぜなら，オーストリア学派は，マルクスの社会内分業，すなわち市場内分業のみに焦点を当て，市場における知識の分業のみを考察の対象にしたからである．それゆえ，われわれは，分業をマルクスのように二つの側面からとらえ，その両者の相互関係が知識と労働の動的な相互関係にいかに関連するのかという観点からも考察することにより，オーストリア学派の分知論の限定的な性格を克服しなければならない．

ここで，われわれが知識をどう考えているかを簡単に説明しておこう．知識

論自体は必ずしも本稿の主題ではないが，スミス分業論の考察のためにこの点をあらかじめ明確にしておくことは有益である．われわれは，マイケル・ポランニーに依拠し，知識を通常考えられているよりも広い意味で理解している(M. Polanyi, 1958, 1966)．それは，情報やデータといった知識の客観的で受動的な定在を含むだけでなく，諸個人の身体と人格に体化され，なんらかの具体的活動において初めて具現されるような知識の主観的で能動的な様相をも含む，一般的な概念である．言い換えれば，知識とは，われわれに対して外的対象や与件として存在するものではなく，創造・発見，伝達・流通，蓄積・保存といった人間の主体的活動を通じてたえず生産／再生産されなければならない．知識は，主体的関与と実践的活動を媒介にして新たに創造されるとともに，繰り返し再生産されるものであり，それはある種の労働生産物であるとさえいえる．この主体的関与と実践的活動のなかで特に重要な役割を果たすのが，身体に媒介された「認知」と「労働」であり，そうした営みを通じて身体にパターン化されて内化される知識が「認知枠組み」と「熟練・技能」である．このような知識は，身体に内属し，その活動をとおして発現する．このため，このような知識は，主体の焦点的意識とそれに対する従属的諸細目の関係を統合する身体的営みを不可欠な要素とし，人格的・暗黙的な性質を帯びるのである．資本主義経済において知識は，「市場過程＝社会内分業・分知」と「労働過程＝企業内分業・分知」という二つの過程を通じて創造・発見，伝達・流通，蓄積・保存されている．市場過程と労働過程は知識の生産／再生産過程でもあるという意味で，われわれは，これら二つの過程をあわせて「知識過程」と呼ぶ．経済学が知識を適切に扱うためには，オーストリア学派の分知論の限界を超え，市場過程と労働過程からなる知識過程の動態的メカニズムを考察の対象としなければならないのである．われわれは，新古典派経済学がその分析の対象としている市場の内部のみならず，非市場的な組織や制度の内部に今一度目を向けなければならない．もちろん，このことは，マルクスの労働過程分析をそのまま継承するということを意味しない．むしろ，労働を物的生産物のみならず，知的生産物としての知識をも創り出す行為としてより広い文脈に位置付け直す必要がある．また，本稿で詳しく論じる余裕はないが，マルクスが，『グルントリッセ』から『資本論草稿』『資本論』へと研究をすすめるうちに，彼の議論の

重点を社会内分業よりも作業場内分業，なかんずく機械体系における生産の意識的な計画や統制へとおくようになったことの問題点を同時に考え直さなければならないのである．

本稿は，前掲の諸作業仮説のうち，1）についてスミスの分業論を再検討することを目的とする．すでに述べたように，「分業」という概念は，われわれの研究課題にとって中心的な役割を果たす準拠枠であるが，この概念を明確にするためには，分業を初めて経済学の基点にすえ，それを体系的に考察したスミスにまで遡って考え直す必要があるのである．われわれは，スミス分業論から分業の動態的メカニズムを抽出し，それに基づいてマルクスの協業・機械論を再検討し，2）以降の作業仮説を改めて検討する予定である．

スミスは，「国富の本性と起源の探究」を分業の分析から始めた．分業とは〈division of labour〉の訳語であって，文字通りには「労働の分割」を意味している．しかし，スミスの分業とは何を意味するのか，なぜスミスは分業を『国富論』の起点にすえたのか，そして，それはどのようなメカニズムで国富を発展させるのかは，いまだ明確にされていないのではないか．これらの諸点をスミスのテクストの再解釈を通じて明らかにしたい．

スミスのテクストは修辞学的な技法に富む多彩な文体をその特徴とする．そして，その論述の展開はしばしば錯綜している．彼の例示はきわめて印象的だが，それがかえって彼の主張を読者につかみにくくしてもいる．たとえば，スミスは，まず一般の人々に理解しやすい例を挙げ，それをメタファーとして利用しつつ，彼が主張したい結論を人々の一般常識に反するような形で印象的に導きだすという手法をしばしば用いている．このため，スミスの屈折した論述の進行に十分な注意を払わずに，ある特定の文章のみを取り出して解釈すると大きな誤りを犯すことになる．われわれは，スミスのテクストの修辞学的な技法にも注意を払いつつ，従来の解釈でしばしば見失われているスミス分業論の全体的構成とその位置づけを浮き彫りにすることに専念したい．もちろん，それは細部に関して正しいスミス解釈を提示することを目的とするものではない．われわれは，あくまで上に掲げた諸命題を吟味するための予備作業としてスミスを読むつもりである．

1　富の源泉としての「熟練・技能および判断力」

よく知られているように，『国富論』序論の冒頭は次の文章で始まる．

「(1)あらゆる国民の年々の労働は，その国民が年々に消費するいっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する基金（fund）であって，この必需品および便益品は，つねにその労働の直接の生産物か，またはその生産物で他の国民から購買されたものかのいずれかである．

(2)それゆえ，この生産物またはこれで購買されたものが，それを消費すべき者の数に対する割合の大小に応じて，その国民は，必要とするいっさいの必需品および便益品を，十分にまたは不十分に供給されることになるであろう．

(3)しかしこの割合は，どのような国民のばあいにも，二つの異なる事情，すなわち第一に，その労働が一般に充用される場合の熟練・技能および判断力(skill, dexterity, and judgment)，また第二に，有用な労働に従事する者の数とそういう労働に従事しない者の数との割合，によって規定されざるをえない」(Smith, 1950, p.1, 89-90頁[2])．

これは一続きの論述であるので，その一部分だけからスミスの主張を抽出するべきではない．にもかかわらず，文(1)をそれ以後の文(2)，(3)から切り離して取り出し，国民の労働は「いっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する基金」であり，「国富」は，重商主義者の主張するように貨幣ではなく，国民の労働である，というのがスミスの基本命題であるとしばしば理解されている．また，スミスの経済学には，二つの労働価値説，すなわち投下労働価値説と支配労働価値説が混在しているといった批判も，そのような解釈を前提としてなされている．しかし，はたしてスミスは，富の源泉が労働（労働量としての）であると主張しているのだろうか．

先の文章では，明らかに「それゆえ」以降の(2)，(3)，なかでも「しかしこの割合は」以降の文章(3)に強調点がある．スミスは，まず(1)で，第5章における諸商品の実質価格（労働価値）に関する説明，すなわち，「労働こそは，最初の価格，つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣（original purchase-money）であった」(p.32, 151頁）という説明とほぼ同じ内容を述べ，

次の(2)で，国民一人あたりの生産物の消費量が，全生産物と国民の数の割合であることを確認した上で，(3)では，国民一人あたりの生産物の消費量は，労働の質と量を決定する「二つの事情」に規定されると論じているわけである．このように，これらの文章は，富の源泉へと抽象していく思考のプロセスそれ自体を表現したものにほかならない．それゆえ，(1)はまだ抽象化の途上にある暫定的な命題であると考えなければならないのではないか．ここでスミスは，「いっさいの生活必需品および便益品を本源的に供給する基金」あるいは「いっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣」である労働からさらに遡行して，労働の質と量にかんする「二つの異なる事情」，すなわち，「労働が一般に充用される場合の熟練・技能および判断力」と全人口に対する生産的労働者の割合から富をより本源的に説明しているのである．

しかも，先の文章に続く一文，「そのうえ，この供給が潤沢かまたは乏しいかは，これら二つの事情のうち，後者よりも前者に依存しているように思われる．」(p. 2，91頁)から，説明の重心は明らかに後者ではなく前者にあることがわかる．スミスがここでいう「熟練・技能および判断力」とは，その中に「判断力」が含まれていることからみても，「生産技術」のような客観的・理論的な知識ではなく，労働者が技能として体得し，労働過程においてのみ発揮しうるような主体的・実践的な知識であると考えるべきであろう．それゆえ，実際にはスミスの基本命題は次のように要約できる．富の源泉は「熟練・技能および判断力」として体現される人間の主体的・実践的知識である，と．

しかし，こうした解釈には多くの反論が予想される．たとえば，大河内一男は，われわれと異なり，「スミスは第一の労働の『熟練，技能および判断力』すなわち後にかれが『勤勉』という言葉で表現しようとしている要因の方がその重要度が高い」(大河内，1979，170頁)と述べ，「熟練，技能および判断力」は実は「勤勉 (industry)」にほかならないと主張している．大河内はさらに次のように述べている．

「この時代の課題は，『怠けもの』をどうやって勤勉な働き手に駆り立てるか，であり，人々にたいして，どうやって勤勉の効用を説くかにあった．それは勤勉そのものが人間にとって価値あるものであることを人々に説明することではなく，勤勉が社会の富を増大させるものであること，そしてそれを促すものは神授の利己的本能であり，他人のことより己のことをまず第一に配慮するという『利己心』＝『自愛心』に由来するものであり，しかもそれが無意識の過程を経て，つまり，スミスの表現をかりるなら，神の「見えざる手に導かれて」〈led by an invisible hand〉社会全体の福祉につながるものであることを人々に理解させることが必要であった」(ibid.，191頁)．

このように，大河内は，労働を「煩労と労苦」であるととらえたうえで，そのようなつらい仕事に耐えうる作業態度や職業倫理としての「勤勉」が労働過程で醸成されれば，ピン製造業にみられるように，作業場内分業で労働の生産力が上昇すると考えている．すなわち，「『勤勉と怠惰』が対立する問題点であったスミスの時代において，勤勉によって高められる労働の生産力こそが富をつくりだす唯一の源泉であった」(ibid.) というのである．しかし，スミスが，製造業のみならず農業にも見られる「熟練・技能および判断力」を製造業における労働者の作業態度や職業倫理（エートス）とみなしていたと考えることはできない．

改めて整理すれば，このような解釈は以下の三点において問題がある．すなわち，1）労働をたんに「煩労と労苦」ととらえている，2）スミスの分業の中心を作業場内分業とみなしている，3）技能を体化された判断ではなく体化された態度（モラル）や精神（エートス）とみなしている．これは，資本主義の精神をプロテスタンティズムにもとづく職業倫理に見出すウェーバーの主張の文脈でスミスを理解することから生じる誤った解釈である．スミスは，豊かな賃金は労働者の「勤勉」を刺激するとは述べているが，「勤勉」を「技能」と同一視してはいない．たとえば，スミスは，ピン製造について次のように述べている．

「この仕事 (business)（分業はこれを一つのまぎれもない職業 (trade) にした）のための教育もうけず，またそこで使用される機械類（その発明をひきおこしたのもおそらく同じ分業であろう）の使用法も知らない一職人は，最大の勤勉をもってしても，おそらくは一日に一本のピンをつくることさえまずできないであろうし，二十本をつくることなどはもちろんできないであろう．……けれども，もしかれらのすべてが個々別々に独立して働き，またそのだれもがこの特別の仕事のための教育を受けていなかったならば，かれらのおのおのは，

一日に二十本はおろか，おそらくは一本のピンさえつくれないであろうことはたしかである」(pp.6-7，99-101頁).

スミスは，社会内分業が，職業の分化とそこで使用される機械を生み出したことをカッコ内で確認しつつ，職人がどれほどの「勤勉」をもってしても，特定の教育もうけず，機械を使用する技能や熟練も持っていないならば，ピン一本も製造できないと指摘しているわけだ．このように，スミスは「技能や熟練」と「勤勉」を明確に区別し，分業の結果として労働の生産力が増大するのは「勤勉」ではなく「技能や熟練」によってであると考えている．しかも，ピンの作業場内分業による生産性の上昇を説明した後の「けれども」以下の一節では，いくら作業場内分業が進んだとしても「協業」と「教育」がなければピンを製造できないとも指摘している．ここでは，「個々別々に独立して働」く独立制手工業ではなく，協力して集団で働く協業ないし結合労働における技能や熟練の重要性を説いていると考えてよい．

このように，スミスは，『国富論』冒頭で富の源泉を「熟練・技能および判断力」としての「主体的・実践的知識」に見ているのである．それゆえ，この冒頭の一節は，「煩労と労苦 toil and trouble」(p.32，150-1頁）としての投下労働が価値を生むという労働価値説の「静態的」な意味において理解すべきではなく，知識過程の「動態的」発展の文脈において解釈しなければならない．後に述べるように，労働の分割である「分業」(division of labour）こそが産業・職業の分化，専門化（社会内分業）や生産工程の細分化（作業場内分業）をもたらし，両者を媒介にして形成される「熟練・技能および判断力」こそ長期的に富を増進させる要因であると考えられている．あらゆる著者が自著の冒頭には最大限の注意を払うとすれば，ここにはスミスの中心的ヴィジョンが表現されているはずである．スミスは経済を動態的に把握し，その富の源泉を労働の量的側面よりもむしろその質的側面に，言い換えれば，労働過程において発現される主体的・実践的な知識に求めたのである．

先の文章に続けてスミスは，野蛮民族と比較すると，文明社会では，多くの人々が働かずに大量の消費をしているにもかかわらず，必需品や便益品が豊かに供給されているという事実を引き合いに出す．それはまさに，労働の生産諸力におけるこの改善はもっぱら「熟練・技能および判断力」によるとの主張を

例示するためにほかならない．このように富の源泉を労働から「熟練・技能および判断力」へと抽象していく，原書2ページの第一パラグラフまでが「序論および構想」のうちの「序論」にあたる．ここではまだ「熟練・技能および判断力」に由来する労働の生産諸力に改善をもたらす原因はなにかという根本的な問いを発していない．スミスはこれに続いて第一編以下の構想を概説しているものの，そこでも第一編では，この労働の生産諸力における改善の原因と労働生産物の諸階級への分配を扱うと予告するにとどまっている．

2　「熟練・技能および判断力」を動態的に発展させるメカニズムとしての分業

——「社会内分業」と「作業場内分業」の双方向的因果関係

第1編第1章「分業について」冒頭では，先の問いを提示せずに，いささか唐突に「労働の生産諸力における最大の改善と，またそれをあらゆる方面にふりむけたり，充用したりする場合の熟練・技能および判断力の大部分とは，分業の結果であったように思われる.」(p.5，98頁）と，問いに対する答えのみを提示する．これは冒頭における結論の提示としては必ずしも強い断言口調ではなく，むしろ「大部分」や「と思われる」という譲歩の表現を含んでいる．それは，スミスがここできわめて慎重になりながら，ここに論理的な推論では乗り越えられないある種の飛躍があることを無意識のうちに気づいていたからではないか．

スミスは，「序論」で富の源泉を労働における「熟練・技能および判断力」へと抽象したうえで，この章では，労働に関わる「熟練・技能および判断力」の発展を生み出す動態的メカニズムとして分業を分析しようとしている．それは，第5章以下の定常的経済における自然価格と名目価格の決定や生産物の分配にかんする〈静態的〉理論とは決定的に異質な要素を含んでいる．第1章冒頭の表現は，この動態的メカニズムとしての分業を抜きにしては富の源泉とその発展について語ることはできないということを含意している．では，そのようなメカニズムとしての分業とはいかなるものなのか．次にこの点を見よう．

先の第1章冒頭の文章に続いて，スミスは直ちにあの有名なピン製造の例を挙げているわけではないことに注意すべきである．彼は次のようにあらかじめ

注釈を加えている．

「分業がいくつかのきわめて零細な製造業でもっともよく進歩している，とふつう考えられているのは，おそらくここでの分業が他のいっそう重要な製造業のそれよりも実際に進歩しているからではなくて，少数の人々のわずかの欲望を充足すべき零細な製造業では，職人の数も必然に少数であるにちがいないし，また仕事のさまざまな部門のおのおのに従事する者は，同一の仕事場に集められ，一人の観察者が同時に一目で見渡せるところにおかれているからであろう．これに反して，人民の大多数の多大の欲望を充足すべき大製造業では，仕事のさまざまな部門のおのおのがきわめて多数の職人を使用しているから，そのすべてを同一の仕事場に集めるのは不可能なほどである．われわれは，単一部門の従業者以上に多くのものを一時に見わすことはめったにできない．それゆえ，たとえこのような諸製造業のほうが，いっそう零細な性質のものよりも，実際には仕事がはるか多数の部分に分割されているであろうけれども，その分割は，一見して自明であるどころではなく，したがってまた観察されることもはるかに少ないのである」(p. 6，99頁)．

ここでは，この直後に取り上げるピン製造工場のような零細な製造業における分業は，大製造業における分業に比べて観察しやすく，また理解しやすい分業の一例としてあげられている．ここで，スミスは一貫して「分業」という同じ語を用いているが，実際にはそれは，マルクスのいう「作業場内分業（マニュファクチュア内分業）」と「社会内分業」の両方の意味を含んでいると言ってよい．「同一の仕事場に集められ，一人の観察者が同時に一目で見渡せるところにおかれている」ような分業が前者であり，「仕事のさまざまな部門のおのおのがきわめて多数の職人を使用しているから，そのすべてを同一の仕事場に集めるのは不可能な」分業が後者である．

たしかにマルクスがいうように，スミスにおいては「社会内分業はただ主観的に，すなわち観察者にとって，マニュファクチュア的分業と区別されるだけ」(Marx，1962，S. 375，(2)220頁）である．スミスは，この両者を商品の売買を媒介するか否かで明確に区別していないし，異なる用語を割り当ててもいない．しかし，社会内分業の意義をいかにして人々に伝達するかというスミスの工夫がそこにあると見ることもできる．また，あとで論じるように，スミスは

社会内分業を市場内分業と同じものであると考えていたとは必ずしもいえない．マルクス自身も，「一つの社会の全体のなかでの分業は，商品交換によって媒介されているかどうかは別にして，非常にさまざまな経済的社会構成体に属するのであるが，マニュファクチュア的分業は，資本主義的生産様式のまったく独自な創造物なのである」(ibid., S. 380，(2)227-28頁）と述べ，社会内分業を市場内分業と同一視することに一定の留保を付けている．

よく知られているように，ピン製造工場における分業の記述は，ドゥエールが書いたとされる百科全書の「ピン」という項目にもっぱら依存しているのであって，スミス自身の観察によるものではない．にもかかわらず，スミスが「作業場内分業」の事例によって「分業」を説明したのは，このような印象的な事例を経由することで，「社会内分業」が「作業場内分業」に劣らぬほど大きな意義をもつということを読者に納得させようとしたからではないか．ピン製造の例に続けてスミスはさらにいう．

「分業の効果は，他のあらゆる工芸や製造業においても，このきわめて零細な製造業と同様である，といっても，その多くのものは，労働をこれほど多数に細分することも，また作業をこれほどはなはだしく単純化することもできない．にもかかわらず，分業は，それを導入できるかぎり，あらゆる工芸の労働の生産諸力を比例的に増進させる．さまざまな職業や仕事が互いに分化するのも，この利益の結果として生じたもののように思われる．そのうえこの分化(separation)は，一般に最高度の産業と文明を享受している国々でもっともすすんでいるのであって，未開状態の社会における一人の作業は，文明社会においては，一般に数人の作業になるからである」(p. 7，102頁)．

スミスは，「分業は，それを導入できるかぎり，あらゆる工芸の労働の生産諸力を比例的に増進させる．さまざまな職業や仕事が互いに分化するのも，この利益の結果として生じたもののように思われる」と述べ，作業場内分業がもたらす労働の生産力の増加という利益の結果，職業や仕事の分化，すなわち社会内分業が発展すると論じている．つまり，作業場内分業から社会内分業への因果関係を説明しているのである．しかし，後に見るように，この因果関係は実は一方向的なものではないのであって，後者から前者への逆方向の因果関係も存在する．

だが，スミスとしては，このことを説明する前にまず社会内分業の意味を読者に理解させる必要がある．そのため，労働生産力の増大が観察しやすい作業場内分業をまず例に挙げ，それをベースとしてひとまず設定し，その理解を基盤にしてターゲットである社会内分業，すなわち「職業や仕事の分化」を理解させようとしているわけである．つまり，ピン製造における作業場内分業にかんする印象的な事例は，目で見ることができない社会内分業を理解させるためのメタファーとして導入されている．ベースからターゲットへのこのアナロジーは，社会内分業の意義を読者に説得するための技法として駆使されているのである．

スミスはさらに，社会内分業の例として，農業と製造業の分業へと話を進める．

「農業においては，その性質上，製造業ほど労働を多数に細分する余地はないし，またそれほど完全に仕事を互いに分化する余地もない．ふつう大工の職業が鍛冶屋のそれから分化しているように，牧畜業者の仕事を穀物耕作者のそれから全く分化させてしまうことは不可能である」(pp.7-8，102頁）と，農業ではそれほど分業が進まないことを指摘し，その理由を「そういうさまざまの部類の労働（すきで耕す・まぐわで耕す・種をまく・収穫する）を行う機会は，年間のさまざまな季節の移り変わりとともに回ってくるものであるから，一人の人が終始一貫してどれか一つの仕事に従事するということは不可能なのである」(p．8，103頁）と説明する．

農業では，自然の季節的変動に人間が対応しなければならないので，個人が特定の作業に特化し終始一貫して従事することは不可能である．言い換えれば，農業には分化しがたい「熟練・技能および判断力」が存在しているがゆえに，分業による生産性の上昇は製造業に比べて鈍いものにならざるをえない．したがって，先進国では農業よりも製造業がよりいっそう発展するわけである．スミスはこの点をさらに次のように説明している．

「農業に従事する労働のさまざまの部門のすべてを，完全にあますところなく分化してしまうのは不可能だということが，おそらく農業技術における労働生産力の改善が，なぜもろもろの製造業のそれを必ずしもつねに歩調をあわせることができなかったか，ということの根拠であろう．実際のところ，最も富裕な諸国民は，農業においても製造業においても，一般にそのすべての隣国民をしのいでいるが，かれらは前者よりも後者の優越性によっていっそう他をひきはなすのが普通である」(ibid.)．

スミスのこの説明を逆にして言い換えるならば，次のようになろう．すなわち，製造業における方が農業よりも職業の分化を基盤とする社会内分業が進みやすく，また，このような社会内分業の進展を前提にして，ピン工場におけるような作業場内分業がはじめて可能になる，と．そして社会内分業の拡大が作業場内分業をすすめる結果，作業場内にも新たな「熟練・技能および判断力」が形成されるのである．

他方，スミスは別の箇所では，農業について，それがいかにさまざまな熟練や経験，判断力や分別を要求するかについて述べている．

「農業という田舎での重要な職業を営む資格をえるために，徒弟修行が必要だと考えられたことはまだ一度もない．ところが，芸術とか自由職業とかいわれているものにつぐものとしては，この職業ほどいろいろさまざまな知識や経験を必要とするものもないのである．……そのうえ，作業の指揮にしても，それが天候のあらゆる変動や他の多くの事故にともなって変化せざるをえないものの場合には，それがつねに同一またはほとんどまったく同一であるものの場合よりも，はるかに多くの判断力や分別を必要とするのである．農作業の一般的指揮という農業者の技術ばかりでなく，田舎の労働者の多くの下級部門もまた機械職人の職業の大部分のものよりもはるかに多くの熟練と経験を必要としている」(p.128，347-48頁)．

農業者や田舎の労働者の方が機械職人の労働よりもはるかに多くの「熟練・技能および判断力」を要する．なぜならば，農業者は，たえず変化する自然環境においてはなんらかの徴候を読む技能，そしてそれにもとづいて一定の定型的パターンを行う技能や判断力を強く要求されるからである．また，田舎の労働者は，限られた市場において人々のより多様な要求に対応するために，多くの熟練や技能の習得が必要となる．

つまり，これらの事例を通じてスミスは，社会内分業が作業場内分業を規定するという，先に見た因果関係とは逆方向の因果関係を説明していたのだ．このように，作業場内分業と社会内分業は双方向的ループを形成しており，それ

らは相互に影響を与えながら動態的に発展するのである．富の源泉としての「熟練・技能および判断力」は，道具や機械に体化された生産技術のように生産過程の外部から装塡されるような静的なものではない．それは，労働という主体的活動が実際に行われる労働過程において繰り返し再生産されつつも，作業場内分業と社会内分業の双方向的因果関係が形成する動的メカニズムにより絶えず変容をうけ更新されているのである．

第１章後半では，次のように，スミスは分業による労働の生産力の増大の原因について論じている．ここでもまた，スミスは実質的に二つの分業と労働生産力の関係を問題にしていると考えることができる．

「分業の結果として，同一人数の人々がなしうる仕事の量がこのように大きく増加するのは，三つの異なる事情，すなわち第一に，あらゆる個々の職人の技巧の増進，第二に，ある種の仕事からもう一つの仕事へ移るばあいふつうには失われる時間の節約，そして最後に，労働を促進し，また短縮し，しかも一人で多数の仕事をなしうるようにするところの，多数の機械の発明，に由来するのである」(p. 9，105頁)．

これら三つの原因は，いずれも「作業場内分業」にかんするものであると考えられているが，それらは「社会内分業」についてもいえる．職人の技巧の増進や仕事間の移動時間の節約は，作業場内における仕事や作業の分割のみならず，職業分化や専門化によっても達せられるからだ．

だが，二種類の分業との関連は，機械の発明についての見解に特に強く現れている．スミスは，「すべての機械類の発明も，本来は分業に由来するように思われる」(p.11，108頁）というが，ここでいう分業は，明らかに，作業場内分業だけでなく社会内分業をも指している．次に見るように，機械の発明は二つの分業の観点からそれぞれ別々に分析されているのである．

「分業の結果として，各人の注意の全部は，自然にあるきわめて単純な目的に向かうようになるのである．それゆえ，当然期待されるように，仕事の性質上改善の余地があるばあいにはどこでも，その労働の特定部門のおのおのに従事するだれかれが，まもなく自分自身の特定の仕事をもっとたやすく，しかもてっとりばやくおこなう諸方法をみいだすであろう．労働が最も細分されている製造業で利用されている機械類の大部分は，本来，ふつうの職人たちが発明したものであって，かれらのおのおのは，あるきわめて単純な作業に従事していたから，この作業をおこなうためにいっそうたやすく，しかもてっとりばやい諸方法をみいだそうと自然にその思慮をめぐらしたのである」(p.11，108-109頁)．

このように一方で，スミスは，機械が労働過程の内部で仕事に従事する「ふつうの職人」により発明されるという点を強調している．職人たちは，作業場内分業の結果，特定の仕事や作業に従事し，各人の注意が自らの特定の作業へと集中する結果，「熟練・技能および判断力」が形成される．彼らは自らの労働を節約するために機械を発明する．この意味で機械の発明は，職人たちが自らの身体に体化した「熟練・技能および判断力」を客観的に認識し，それを外的対象である機械へと移しかえることであるといえるだろう．このような現場における，いわば「小さな発明」にこそ「熟練・技能および判断力」が要求されるということをスミスは正確に把握している．スミスがいう「熟練・技巧および判断」とは，主体的かつ実践的な活動である労働において育まれるのであって，単なる観照的思索から生まれてくるものではない．

他方で，スミスは次のように，その労働過程の外部で機械製作者や哲学者ないし思索家が機械を発明することをも同時に指摘している．これは，社会内分業が引き起こす機械の発明についての説明にほかならない．

「とはいえ，機械類についての改善は，全部が全部，もろもろの機械を使用する人々の発明であったわけではない．多くの改善は，機械を製作するということが一つの特別の職業の仕事になったそのときに，機械製作者たちの創意によってなされたものであり，またいくつかの改善は，なにごともしないがあらゆる事物を観察することを職業とし，それゆえにまた，もっとも遠距離にある異質の諸対象の力をしばしば結合しうるところの，哲学者または思索家とよばれる人々によってなされたのである．社会の進歩につれて，哲学や思索は，あらゆる他の職業と同じように，市民の特定階級の主要または唯一の生業になり，また職業にもなった．そのうえ，あらゆる他の仕事と同じように，この職業もまた多数のさまざまの部門に細分され，そのおのおのは哲学者たちの特別の仲間や階級に職業をあたえるし，さらに，哲学における仕事がこういう風に細分されるということが，あらゆる他の仕事のばあいと同じように，技巧を改善し

時間を節約するのである．各個人は自分自身の特別の部門についていっそう専門家になり，それによって全体としていっそう多くの仕事が成しとげられ，科学的知識の量もまたかなり増進されるのである」(p.12，111頁)．

このように，「多くの改善は，機械を製作するということが一つの特別の職業の仕事になったそのときに，機械製作者たちの創意によってなされたもの」である．機械がそれを使用する作業場の外部で発明されるのは，社会の進歩につれ，機械製作者，哲学者または思索家といった専門的職業が「市民の特定階級の主要または唯一の生業」として分離し独立に存在することができるようになり，そうした専門的職業家が作業場の外部から作業工程を観察し，そこに存在する相互関連を考察して，機械においてそれを再現することができるからである．つまり，このような作業場外での機械の発明は，専門家たちの生来のすぐれた才能や能力の成果であるというより，社会内分業が引き起こす職業上の分化や専門化という客観的条件の産物に他ならない．こうした考え方はまた，次のようなスミスの能力にかんする独特な見解にも対応している．

「さまざまの人の生得の才能の差異というものは，われわれが気づいているよりも，実ははるかに小さいものであって，さまざまな職業にたずさわる人々が成年に達すると，天分にひじょうな差異があっていかにも他をひきはなしているように思われるけれども，多くのばあい，それは分業の原因というよりもむしろその結果なのである」(p.17，120-21頁)．

スミスは，社会内分業の結果，人々がさまざまな職業に従事することを通じて「熟練・技能および熟練」が後天的に形成されるために，人々の間に天賦の才能の差異があるように見えるのだ，と主張しているのである．ここでもまた「熟練・技能および熟練」の実践的・現場的な性質が強調されているといってよい．

マルクスのスミス批判以来，スミスは，作業場内分業と社会内分業の両者を区別せずに連続的なものとみなしているといわれてきた．しかし，スミスの議論を細かくたどってみると，分業をこれら二つの面で実質的に区別しているだけでなく，社会内分業と作業場内分業を相互に影響を与え合うものとして理解していたことが明らかとなる．これら二つの分業の間には双方向的な因果関係があるために，それらは自己強化的ループを形成する．この分業の動態的メカニズムを通じて，職人の熟練・技能および判断力が更新され，機械が発明される．そして，その結果として労働生産力が増大する．スミスは，このことを説明するために，観察しやすいピン工場のような作業場内分業の例をメタファーとして利用して社会内分業の意義を読者に理解させようとしたのである．

3　社会内分業を引き起こす触媒としての交換性向

いま見たように，スミスは，第1章で労働の生産力をもたらす分業の動態的メカニズムを分析した．その上で，第2章で分業を引き起こす原理について考察している．

「これほど多くの利益が引き出されるこの分業というものは，もともとそれがひきおこす一般的富裕を予見したり，意図したりする人間の英知の所産ではけっしてない．それは，このような広大な効用をまったく眼中におかぬところの，人間の本性のなかにある一定の性向，つまりあるものを他のものと取引し，交易し，交換するという性向の，ひじょうに緩慢で漸進的ではあるが必然的帰結なのである」(p.15，116頁)．

スミスはここで，分業が人々の予見，意図，英知の所産ではなく，意図せざる無意識的な結果であること，また，それが取引・交易・交換する人間の本性的な性向の必然的帰結であること，を指摘している．ここでいわれている分業とは明らかに社会内分業を意味している．では，スミスは，社会内分業を市場内分業とまったく同じものであると考えていたのだろうか．これが次に問題となる．

スミスは，「取引し，交易し，交換するという性向」は人間に特有なもので，おそらく「理性や言語という諸能力の必然的な帰結」であるという．理性や言語が人間という種が系統発生的な進化過程で獲得した能力であるように，人間の交換性向もまた進化過程のある時点で獲得した能力であるというわけである．問題は，市場の発生が交換性向の必然的帰結であると，スミスが考えているかどうかである．

この章で，スミスは，交換性向から貨幣や市場が必然的に発生してくるといった議論をどこでも展開していない．スミスは，交換性向から必然的に帰結するのは社会内分業であり，そうした社会内分業のもとで行われる取引とは市場

における商業取引ではなくて，独立生産者の間の互酬的（互恵的）な交換であると考えている．このことは，スミスが考える人間に特有な交換性向の内容を吟味することで明らかとなる．

「人間はほとんどつねに仲間の助力を必要としていながら，しかもそれを仲間の博愛心（benevolence）だけに期待してもむだである．そうするよりも，もしかれが，自分に有利になるように仲間の自愛心（self-love）を刺激することができ，しかもかれが同胞に求めていることをかれのためにするのが仲間自身にも利益になるのだ，ということを示してやることができるならば，このほうがいっそう奏功する見込みが多い．……われわれが自分たちの食事を期待するのは，肉屋や酒屋やパン屋の博愛心にではなくて，かれら自身の利益に対するかれらの顧慮を期待してのことなのである．われわれは，彼らの人類愛にではなく，その自愛心に話しかけ，しかも，かれらにわれわれ自身の必要を語るのではけっしてなく，かれらの利益を語ってやるのである」（p.16，118頁）．

人間は，仲間の博愛心にではなく仲間の自愛心に訴え，提案をし説得を試み，両者の同意に基づいて交換を行う．これは，人間が単に利己的であるということを意味しない．もしそうならば，人間は自分が必要とするものを他人から略奪したり，盗んだりすることもできるはずだからである．スミスの交換性向には，『道徳感情論』でスミスが説いた「同感（sympathy）」と「公平な観察者（impartial spectator）」という原理が埋め込まれている．同感とは，憐れみや博愛心のような自然な共感や利他的な同胞感情ではなく，想像において当事者の立場に身を置くときに感じる道徳感情である．われわれは，観察し観察される経験を通じてこの想像上の立場の交換を繰り返すうちに，公平な観察者の立場から道徳的判断を導くことができるようになる．このように交換性向とは，交換の正義と公正にかんするルールに積極的に従いつつ，相手の自愛心に対して積極的に説得を試み，交渉し，合意の上で交換や取引を行おうとする道徳的態度を意味しているのである．

しかし，交換性向に埋め込まれている同感原理には，「一般的富裕を予見したり，意図したりする人間の英知」が要求されているわけではない．その意味で，「公平な観察者」は，社会で行われるすべての取引を鳥瞰しうるような超越的・普遍的な視点に立つことを要求するものではないのであって，自分と相手との

個別的な相対取引において交換の公平性を判断するような経験的・特殊的な立場を獲得するにすぎない．言い換えれば，交換性向とは，「広大な効用をまったく眼中におかぬところ」の局所的・近傍的な交換における公平性の感覚に由来するものである．交換性向を備えた主体とは，自己の効用を常に最大化しようとする合理的主体でもなければ，全体の調和や均衡を見通して判断する超合理的主体でもない．他方において，それは，市場における諸生産物の価格を俯瞰しつつ商業取引における売買差益を第一に追求する商人でもない．公正感覚と限定合理性を核とする交換性向とは，むしろ余剰生産物を相互の必要に基づいて交換する独立生産者にこそ想定しうるものである．事実，スミスが挙げる例に登場するのは，おのおのが熟練・技能および判断力を備えた独立生産者，すなわち，武器製造人，大工，鍛冶屋，真鍮工，なめし工，仕上げ工などである．すでに述べたように，スミスは天賦の才能の差異はそれほど大きくなく，さまざまな職業に従事することで後天的な差異が形成されることを強調する．哲学者と荷運人との差異は，生得のものではなく，「習慣・慣習および教育」の結果である．言い換えれば，生得的に思える才能の差異は実は「分業の原因というよりもむしろその結果」であり，交換を媒介とする職業分化の結果なのである．

スミスは，そのような独立生産者が，互恵的な交換を媒介にして社会内分業を形成するメカニズムを次のように説明している．

「このようにして，自分自身の労働の生産物の余剰部分のなかで，自分自身の消費をこえてあまりあるすべてのものを，他の人々の労働の生産物のなかで，自分が必要とするであろうような部分と交換しうるという確実性が，あらゆる人を刺激して特定の職業に専念させ，その特定の種類の仕事についてかれがもっている才能または天分がおよそどのようなものであろうとも，それを発展させ，完成させるのである」（p.17，120-21頁）．

余剰生産物の交換が普遍的になり，それが可能にする交換の「確実性」の予想が人々に特定の仕事や職業に特化する誘因を与える．その結果として，より多くの生産物が生産され，余剰生産物の交換を通じてお互いがより多くの生産物を獲得することができる．交換性向に発する交換行為は初めは余剰生産物のある生産者間のみで散発的にしか行われないであろう．しかし，余剰生産物の全般的水準がある一定の高さに達すれば，交換性向を備えた多数の生産者間の

余剰生産物交換が社会内分業の進展を可能にし，それが職業的分化や専門化による労働の生産力の増大をもたらす結果，さらなる余剰生産物の生産と交換が可能になる．

「さまざまな職業にたずさわる人々のあいだに，これほど顕著な才能の差異をつくりあげるのがこの性向であるように，その差異を有用なものにするのもまた同じ性向である」(p.18，122頁)．

交換性向は，このようなポジティヴ・フィードバック型の累積的メカニズムを通じて社会内分業を発展させるための「触媒」となる．ここで，交換性向はあくまでも触媒としての役割を果たすものであって，一定の条件が満たされていなければ，それ自身の力によってこうした累積的メカニズムを自発的に発動させるものではない，ということに注意が必要である．

われわれは，前節で，『国富論』第1章から作業場内分業と社会内分業の双方向的因果関係を技能や熟練，そして労働生産力を発展させるための動態的メカニズムとして抽出した．第2章は，そのような分業の動態的メカニズムそのものを駆動する触媒の作用について述べているのである．交換性向を触媒としてまず社会内分業が起動され，さらに余剰生産物の全般的水準がある一定の高さに達するといった条件が満たされるとき，社会内分業は累積的に発展する．その結果として，最後に，作業場内分業と社会内分業の双方向的ループは立ち上がることになる．

ここで重要なことは，ここでいわれる社会内分業とは，商人が介在する商業的な市場交換というよりもむしろ，独立生産者間で行われる余剰生産物の互酬的交換であると考えられているということである．その証拠に，スミスは，第2章までほとんどまったく「市場」，「貨幣」，「商人」という語を用いていない．「市場」という語は続く第3章で初めて登場するのである．

この章の最後で，スミスは交換性向が触媒となって成立する交換の性格を次のように端的に語っている．

「人間のあいだでは，もっとも異質な天分こそがたがいに有用なのであって，それぞれの才能のさまざまな生産物は，取引し，交易し，交換するという一般的性向によって，いわば共同資材(common stock)のなかにもちこまれるのであるから，あらゆる人は，自分が必要とする他の人々の才能の産物のどのような部分をも，そこから購買することができるのである」(p.18，123頁)．

このように，スミスにとって，社会内分業は，参加者のすべての人々が等しく便益をえることができる場であり，商人のような特定のだれかがそこから私的に利益をあげるような場ではないのである．社会内分業とは，人々の異なる生産物を「共同資材」として相互に利用し合う「共有地＝コモンズ(commons)」であるといってもよいだろう．

4　社会内分業の展開を制約する歴史的初期条件としての外部的市場

第3章では，スミスは，交換性向を触媒とする社会内分業の累積的メカニズムが現実に作動するための歴史的な初期条件を説明する．

「分業をひきおこすのが交換力(power of exchanging)であるように，その分業の範囲もまたつねにこの力の大きさによって，いいかえれば，市場の広さによって制限されざるをえない」(p.19，124頁)．

ここで初めて，人間の本性としての「交換性向」という質的な概念だけでなく，「交換力」や「市場の広さ」という量的な概念が導入されている．先に説明した，交換性向から発する社会内分業の累積的発展メカニズムは，生産物交換の「確実性」を人々に信頼させうるにたるある一定の余剰生産物の水準もしくは一定の労働生産力の水準を超えなければ作動しなかった．そのための歴史的初期条件として「交換力」あるいは「市場の広さ」がここで改めて取り上げられているのである．

とりあえず，「交換力」と「市場の広さ」を次のように考えておこう．「交換力」とは，個人に内在する性質である交換性向が実際の交換取引を実現するための客観的な制約条件である「購買力」であり，「市場の広さ」とは，それを全体として集計したマクロ的概念，現代的な表現に直せば「有効需要」である，と．「有効需要」という語を用いたのは，スミスが，ずっと後の方で次のように述べているからである．

「あらゆる特定の量の商品の市場価格は，実際にそれが市場へもたらされる量と，その商品の自然価格をよろこんで支払う人々の需要との割合，いいかえれば，それをそこへもたらすために支払わなければならない地代・労働および利

潤の全価値をよろこんで支払う人々の需要との割合，によって規定される．このような人々の需要は，この商品を市場へもたらすことを有効にするのに十分であろうから，このような人々は有効需要者（effectual demander）とよんでさしつかえないし，またこのような人々の需要は有効需要(effectual demand)とよんでさしつかえない」(p.58，203-4頁)．

もちろんここではまだ，貨幣，価格，需要といった概念は明示的には導入されていない．初めて導入された「市場」は，社会内分業を発展させ，労働生産力を発展させるための歴史的な初期条件を説明するために導入された暫定的な概念である．

スミスによれば，分業を発展させるほどの「市場の広さ」を提供するのは，田舎ではなく大都会である．なぜなら，都会の人口密度が高いからであり，それが大きな市場を形成するからである．また，水運は陸運よりも市場を拡大するので，市場は沿岸地方や河川岸から内陸へと拡大し，それに伴い技術や産業の改善が進展する．

「水運によるほうが,陸運だけで提供しうるよりもいっそう広大な市場をあらゆる部類の産業に開放するように，あらゆる産業が自然に細分され改善されはじめるのもまた，沿岸方面や航行可能な河川の岸にそってであって，そういう改善が国の内陸地方にひろがることがよくあるのも，そのずっとあとになってからのことなのである」(p.20，125-6頁)「水運の利益はこのようなものであるから，技術や産業についての最初の諸改善が，この便益のおかげであらゆる部類の労働の生産物の市場が全世界に開放されているところでおこなわれ，そしてずっとあとになってから，それらがその国の内陸諸地方に広がる，ということは自然である」(p.21，128頁)．

水運による商業が発達する海岸地域や河川地域で市場は発達するが，そうした地域で社会内分業は発展し，技術や産業が改善される．「内陸諸地方の市場の広さは，長期間，その周辺の地方の富や人口密度に比例せざるをえなかった」(p.21，128頁）から，その後に，そうした諸改善がその内陸部へと広がる．スミスがこのことを「自然である」というのは，歴史上，水運の発達する地域で市場が発達し，それが引き金になって技術や産業が発達して，それらが内陸へと普及していくという発展経路が一般的であったからにほかならない．

スミスが第3章の後半でエジプト，インド，中国の例をあげて指摘しているように，もし河川による内陸航行が可能であるならば，必ずしも外国貿易に依存しなくても，農業と製造業が発達することは不可能ではない．スミスは，商業の発達が有効需要を生み出し産業の発達を刺激すること，そして商業の発達は運輸交通手段に大きく依存することを認めているが，しかし，地中海貿易を起点として発達したヨーロッパの場合のように，商業の発達が海運による外国貿易を原因とする必然性はなかったといいたいのである．海運よりもし陸運の費用が小さく安全性が高ければ，国内商業の発達が国内産業を発達させたであろう．それゆえ，いまヨーロッパのように外国貿易に依存した市場を「外発的」，エジプト，インド，中国のように内陸航行や陸運に依存した市場を「内発的」と呼ぶならば，ここでスミスは，外国貿易の差額を富の源泉と考える重商主義が外発的市場のみを重視して，内発的市場の発達を軽視していることを批判しているわけである．むろんスミスは，重商主義が説くような商業の重要性そのものを否定したわけではない．商業的な市場の発達が産業の発展にとって制約条件になるとして，商業の重要な意義を明確に理解している．しかし，次節でみるように，スミスは商業の意味をあくまで限定的に理解しようと努めているし，また，けっして商業的な市場を称揚しているわけでも，そこにおける自由を無条件に認めているわけでもない．いわば，重商主義を市場経済が発達する初期における必要悪として受け入れているといってもよい．そして，このことは，スミスにおける社会内分業と市場内分業の区別に結びついている．

スミスは，第2章で，交換性向に基づく生産者間の余剰生産物交換が自生的に社会内分業を発生させると説明した．人々は相手の自愛心に訴えかけるという，本性的に備わっている交換性向の漸進的ではあるが，必然的な帰結として社会内分業は成立する．スミスの社会内分業は，生産者間の互酬的交換に媒介されるある種の市場を生み出すが，それは，商人が利益を求めて取引するような商業的な市場とは異なるものである．もちろん，社会内分業が累積的に発展するためには，余剰生産物を全般的に生み出しうる一定の生産力が必要であるが，ここでそうした前提条件がどのようにして満たされうるかを論じているわけではなかった．

他方，この第3章では，スミスは，歴史的事例をいくつか挙げながら，社会

内分業の初期的発展は，それとは異質な外部的な市場における有効需要により制約されると主張した．ここでは，外発的にせよ内発的にせよ，一般に生産の外部に発達するような商業的な市場を特に問題としている．それは，社会内分業の「離陸」にとって必要とされる交換の確実性を可能にする規模の有効需要が入ってくる場所である．このように，スミスが考える〈市場〉は必ずしも交換性向から自生的に発生するものではなく，独立生産者が形成する「社会内分業」の外部に，それとは独立に発生し発展するものである．つまり，スミスの市場像は一般に考えられているように「内生的」なものではない．むしろ，マルクスと同じく「外生的」なものなのである．

このように，われわれは，第2章は社会内分業の累積的発展にかんする議論であり，第3章はその初期条件を決定する外生的市場にかんする議論であると解釈する．なぜなら，スミスの議論は，交換性向に基づく生産者間の「社会内分業」と利得性向に基づく商人間の「市場」は異なり，「社会内分業」が必ずしも「市場内分業」ではないという主張を暗黙的に含んでいる，と見ることができるからである[3)]．

5　商業の普遍的用具としての貨幣

スミスは，「市場の大きさ」としての有効需要を決める商業を問題とするときには，いまだ貨幣を導入していなかった．それが導入されるのは，市場が普遍化した商業社会を対象とする第4章「貨幣の起源および使用」においてである．

「いったん分業が徹底して確立されると，人間が自分自身の労働の生産物によって充足しうるところは，そのもろものの欲望のなかのごく小さい一部分にすぎないものとなる．……こうして，あらゆる人は，交換することによって生活し，つまりある程度商人になり，また社会そのものも，適切にいえば一つの商業社会（commercial society）に成長するのである」（p.24，133頁）．

「商業社会」とは，社会内分業が徹底され，人々が交換によって欲望の大部分を充足するような社会である．ただし，ここでいう「あらゆる人は，交換することによって生活し，つまりある程度商人にな」るという事態とは，あらゆる人の生活が全面的に生産物交換に依存するということであって，なにも彼らが

売買差益により生計を立てる商人そのものになるということを意味するわけではない．スミスは，この章では，第2章のような独立生産者ではなく，酒屋，パン屋，肉屋といった商人を登場させ，彼らがお互いに生産物を交換しようとしても困難であることから，貨幣が必要とされると説明する．独立生産者もその生産物のすべてを市場で交換しなければならないというほど市場に依存しているならば，商人のように物々交換における欲望の二重の一致の困難を深刻に認識しなければならない．貨幣は，そうした問題を解決するための「商業の普遍的用具」として要請されているのである．

「このような事態の不便を避けるために，分業が最初に確立されたのち，社会のあらゆる時代のあらゆる慎慮の人は，自分自身の勤労に特有な生産物のほかに，あれこれの一商品の一定量，すなわち，たいていの人がそれとかれらの勤労の生産物とを交換するのを拒むまいとかれが考えるようなあれこれの一商品の一定量を，いつでも自分の手もとにもっているというようなしかたで，自分が当面する問題を処理しようと自然に努力したにちがいないのである」（pp.24-25，134頁）．

人類の歴史上，家畜，塩，貝殻，たばこ，砂糖などが貨幣材料として使われたが，やがて耐久性と可分性という観点から金属類が好まれることになり，その後，刻印や鋳貨の制度が確立する．ここで「すべての文明国民の商業の普遍的用具」としての貨幣，「その媒介により，すべての種類の財貨は売買され，また互いに交換されている」（pp.29-30，146頁）ような交換の媒介物ないし交換手段としての貨幣が登場する．貨幣を価値尺度や蓄蔵手段ではなく，実物経済のベールにすぎない交換の媒介物として狭く定義するならば，それは，商業が産業を発展させ，社会内分業を累積的に発達させる過程を制約する条件である「市場の広さ」すなわち有効需要には直接的な影響をなんら与えないはずである．したがって，このような意味で貨幣や市場を導入したとしても，交換性向に基づく剰余生産物の互恵的な交換が基本的に前提されているのである．スミスは，こうした前提を暗黙的に想定することで，貨幣を導入する以前の第3章までの議論を第4章の議論へと整合的に接続しようとしているのではないか．交換性向は，公正感覚と同感原理に基づく自己愛を基本としており，決して貨幣自体を無限に求めるような性向ではなかった．第4章のスミスの商業社会に

はたしかに商人は存在するものの，彼らは自己の利益のみを一方的に追求するような商人資本家ではなく，むしろ独立生産者と交換性向を共有している経済主体である．

スミスは，第7章で製造業者の「特別利得」について説明しているが，そこでも製造業者をけっして資本家として描いていない．

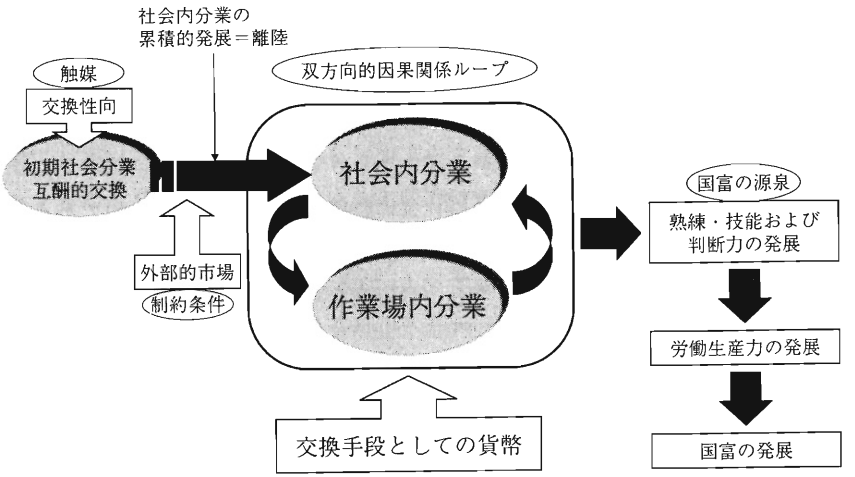
「製造業上の秘密は商業上の秘密よりもいっそうながくたもつことができる．ふつう使用されているものの価格のわずか半分しかかからない原料で特定の色をつくる方法を発見した染色業者は，じょうずに経営すれば，一生をつうじて自分の発見の利益を享受するかもしれないし，遺産として子孫に残しさえするかもしれない．かれの特別利得（extraordinary gains）は，かれの秘密の労働に対して支払われる高価格から生じる．これらの利得は，適切にいえばその労働の高賃金にある．」（p.62，212頁）．

スミスは，秘密の技術から生じる「特別利得」は適切には「秘密の労働にたいして支払われる高賃金」というべきだとして，それを利得であるとは認めない．それに，機械の発明や社会内分業を動態的に進めるための役割を与えていないともいえる．言い換えると，特別利得は，マルクスの特別剰余価値のように，産業資本家が技術革新を推進するための誘因としては考えられていないのである．スミスの商業社会に登場する生産者は「煩労と労苦」としての自己の労働を軽減しようと努力する職人であっても，秘密から売買差益を積極的に獲得しようとする商人資本的な性格を持っていないとされているからであろう．

むろん，売買差益や貿易差益を求める商人資本が存在しない商業社会は現実の経済と必ずしも一致しない．この点からスミスを批判しなければならないし，事実，マルクスはスミスをそう批判している．しかし，スミスの商業社会を，たんなる資本主義経済の静態的な記述モデルではなく，分業の動態的メカニズムを内蔵する，ありうべき市場社会を提示した規範モデルであると解釈することもできる．そう考えれば，スミスの商業社会モデルには，売買差益や貿易差益の獲得を国是として推奨する重商主義に対する批判が暗黙的に含まれていることになろう．

さて，ここで『国富論』第4章までのスミスの議論にかんするわれわれの解釈をまとめてみよう［図1］．

（図1）分業の動態的メカニズム



1）国富の源泉――国富の源泉は，労働の量そのものではなく，その質を規定する熟練・技能および判断である（序論）．

2）分業の動態的メカニズム――社会内分業と作業場内分業の双方向的因果関係のループが作動すると，累積的に労働生産力と熟練・技能および判断力が改善される（第1章）．

3）社会内分業の初期成立過程――独立生産者が交換性向を触媒にして余剰生産物を互恵的に交換を行う時，交換の「確実性」が期待されるならば，コモンズとしての社会内分業が累積的に発達する（第2章）．

4）社会内分業が離陸するための初期制約条件としての市場――外部的な市場の広さがある一定の閾値を越えるとき，交換の「確実性」は満たされ，社会的分業が離陸し，分業の動態的メカニズムが作動する．その結果，労働生産力の増大がさらなる余剰生産物を生み出し，ほとんどすべての必需品と便益品が交換を通じて獲得されるようになる（第3章）．

5）交換手段としての貨幣――貨幣は，物々交換の困難を解消するために発生する商業の普遍的道具であり，交換手段である．商業社会には商人資本は存在しない（第4章）．

ここで描かれた分業社会はけっして静態的・停滞的なものではなく，ダイナミックで進化的要素を含んでいる．その一方で，それは貨幣がもたらす変動や撹乱を基本的に排除している．それは，商人資本を含まないがゆえに商業社会としては非現実的である．しかも，市場経済社会を理論化した記述モデルとしては調和的にすぎるといえよう．しかし，これは，むしろ同感と公平な観察者の原理を含む，人間の交換性向から導き出しうるという意味で自然法的な正義と衡平に基づく，規範的な市場経済社会の動態モデルを描いたものであるとみなすべきである．そのように考えるなら，スミス『国富論』冒頭における議論は，現代の市場社会がめざすべき一つの方向を示すものとして再解釈することができるだろう．

6　スミス，リカード，マルクス，ハイエク

ここでは，スミス以後，リカード，マルクス，ハイエクがスミス分業論をどう理解し，自己の理論の中に位置付けたかについて，簡単に整理しておきたい．これは，知識と労働の動態的相互関係にかんする今後の研究に対する見取り図として役立つものと考える．

これまで見てきたように，スミスは，国富を金・銀などの貨幣に見て自由貿易に反対する重商主義者を批判するために，富の源泉を労働における「熟練・技能および判断力」に見出し，それらを発展させるメカニズムを，交換性向に基づく余剰生産物の交換と社会内分業の間の自己強化過程としてとらえた．その際，この進化過程が作動するための初期制約条件として，スミスは外国貿易や商業都市が可能にする市場のある一定の広さを重視したのである．その意味で，スミスの市場像はけっして自生的・内生的なものではなかった．外部的・外生的な市場あるいは有効需要の一定の規模という閾値が引き金になり，技能に基づく労働生産力と社会内分業が相互促進的に進展するからである．しかし，このような分業論は，スミス以後の資本主義社会の現実の発展の分析というよりもむしろ，実際には，独立生産者がスミスのいう交換性向に基づいて互酬的な交換を行うような理想的な経済社会を描いている．そして，それは歴史上いまだ実現されたことがないような理念的な市場社会像である．

これに対して，リカード（Ricardo，1951）は，投下労働価値説に純化することで，スミスの議論を等価労働量としての価値という〈量的〉視点，および一定の生産技術を仮定する〈静態的〉視点から整合的に再解釈した．価値の数量的分析は，労働価値説のこの純粋化によって初めて可能になった．しかも，このことによって，純生産物の階級間での分配と資本蓄積にかんする問題をより厳密に設定して，その長期動態を分析することができたわけである．しかし，そうすることで，リカードはスミスの理論に含まれていた分業の動態メカニズムを切り捨ててしまい，静態的な意味での労働価値説のみを抽出する結果となった．それは，国富を「煩労と労苦」としての労働の観点から理解するという，古典派経済学の基本的な方向性を決定したのである．

マルクスは，『要綱』（Marx，1976a）段階では次のように考えていた．協業と分業はアソシエーションの二つのあり方であり，労働の集合力はこの二つ，分業と協業の結果である．こうしたアソシエーションの形態とその集合力がひとたび資本に包摂されれば，一方で，二重の資本主義的生産様式――マニュファクチュアと大工業――に転化し，他方で，労働の集合力が資本の集合力に転化する，と．しかし，協業は，『要綱』以後，マルクスの中でより重要な概念になる．『資本論草稿』（Marx，1976b）では，協業が基本形態であり，分業はそのひとつの特殊な様式にすぎず，マニュファクチュアと機械制大工業という二つの資本主義的生産様式も協業の派生形態として理解されている．いわば，アソシエーションという基本概念が消え，その位置に協業が昇格したわけである．その上，分業はマニュファクチュアに併合されたために，作業場内分業が議論の前面に出てきて，社会内分業の意味はきわめて消極的なものになってしまった．

これはなぜなのか．一言でいえば，マルクスが分業体系論よりも生産様式論に比重を置くようになったからであろう．マルクスは，現実の観察から機械制大工業をもっとも重要かつ強力な資本主義的生産様式であると考え，その機械体系における協業の重要性を強く認識した結果，大規模な機械体系の存在を前提にして資本主義の発展を予測し，将来の社会主義社会の構想を立てた．そして，社会全体の機械体系としての組織化が構想された結果，市場を通じた社会内分業の意味はさらに否定的に理解され，作業場内分業の意義がもっぱら強調されることになる．その帰結として，オートメーション体系が経済社会の未来

像として描かれることになった．マルクスは，「第二の生産様式（大工業－筆者）では，労働諸力の結合（規則正しい労働様式をもっての）と科学力の適用が優勢であり，ここでは，労働の結合およびいわば労働の共同的な精神が機械等々のなかに移されている」（Marx，1976a，S．477，2，298頁）と述べており，技術のみならず労働の集合力や協同精神も機械にすべて体化されてるものと考えている．そして，「機械にふさわしい生産様式は，その最も純粋かつ典型的な表現を自動作業場にみいだす」（Marx，1976b，S．2015，9，197頁）と論じている．

さらにマルクスは『資本論』（Marx，1962）で，マニュファクチュアこそ資本（産業資本のというべきだが）のもっとも基本的な生産様式であるという命題を提示する．つまり，商人資本による「問屋制家内工業」では，資本は自己にふさわしい生産様式を打ち立てていないという消極性が明らかにされる．社会内分業＝市場は，問屋制家内工業では非常に重要な位置をしめていたし，マニュファクチュアでも依然として大きな意味を持っていた．これは，スミスが分析したとおりである．しかし，マルクスは，マニュファクチュアを資本制の基本的生産様式と考えた結果，スミスとは異なり，市場や社会内分業の意味を消極的なものとしてしか評価しなくなってしまった．その代わり，マルクスは，資本による統合と組織化に焦点を当てたのである．『資本論』では，二つの分業論が展開されているが，社会内分業を市場内分業とほぼ同一視し，その市場価格の変動を媒介とする不断の不均衡の均衡化をもたらす市場の無意識性・無政府性がもっぱら強調されている．マルクスは，その反面で，機械の意義を大きく評価したために，大工業における協業と作業場内分業の意義を意識性・計画性という観点から過大に評価することになったのではないか．そして，これは，レーニンの「一国一工場論」のような社会主義経済像へと結びついていく議論の流れを作りだした源泉であるともいえよう．

他方で，ハイエクは，スミスの分業論から労働という要素を抜き去り，それを知識の分割，すなわち「分知」（division of knowledge）として再解釈した．しかし，本稿の初めに述べたように，オーストリア学派がその視野を市場における分知論に限定してしまったことの限界も明らかになりつつある．それゆえ，われわれは，分業論と分知論の相互関係をこそ問題にしなければならないのである．労働を知識との関係から考察することで，リカードの設定した方向とは

異なり，分業を，技能や熟練に関係する〈質的〉視点，および，生産技術の体系の進歩という意味で〈動態的〉視点から理解することが可能になる．なぜなら，労働とは生産物を生産する過程であるだけでなく，知識を生産する過程でもあると考えられるからである．そうすれば，生産技術の総体は「知識の体系」として再解釈できる．それは，物的生産物の生産／再生産の過程で技能や熟練をも含む「現場の知識」の総体として繰り返し生産／再生産されると同時に，その一部はたえず更新されるものとして理解できることになるわけである．各生産部門の標準的な生産技術は，この「知識の体系」の一部分にすぎず，生産技術体系は，そのような標準化された技術的知識の各時点における集合的様態でしかない．

ハイエクらオーストリア学派は，市場における競争過程を知識の創造・発見・伝達過程として動態的にとらえてはいる．しかしながら，彼らは，知識を労働のような主体的活動における熟練や技能という点にまで深く掘り下げて考えていない．オーストリア学派の知識とは市場における知識のみを意味しているのであって，それは，商人的な性格をも内包する経済主体が技術・嗜好・機会にかんして分散的に所有しており，売買差益を目的とする市場の取引において利用しうる種類の知識でしかない．そうなると，たとえ市場で直接に売買できない技能や熟練があるとしても，それらは，競争を通じてつねに価格シグナルに間接的に反映されるものであると理解されざるをえない．このように知識の分業は，市場により伝達され利用されるという静態的な側面から主に説明される．その内部にいくつかの異論を含むとはいえ，そうじてオーストリア学派は，現代の情報経済学と同じように，市場を散在する知識が効率的に利用されるシステムであり，価格はそうした知識を凝縮して伝達する効率的な情報形態であると考える傾向にある．このように分業が労働生産力を発展させるといった，動態的進化過程を十分に認識することができないのは，市場を長期的には調整可能な安定的なシステムとして理解しているからであろう．スミスは，有効需要が足りなければ生産物の販売が困難になるばかりか，社会内分業が，ひいては作業場内分業が促進されず，生産力も上昇しないという隘路も存在することを指摘している．つまり，労働生産力を規定する要因である熟練・技能および判断力への市場の促進効果と制約効果をともに理解していたのである．しかし，

競争の利益のみを強調するオーストリア学派には，市場が知識過程を抑制する可能性があること，さらには競争が知識過程を阻害する可能性すらあることを認識していないのである．この意味で，オーストリア学派の市場像は一面的で偏ったものであるといわざるをえない．

以上，スミスの分業論がリカード，マルクス，ハイエクによりいかに解釈されたかを見てきた．その継承・発展の仕方は，リカードのようにスミスの動態的な分業論を切り捨ててしまうか，マルクスのように二つの分業論へと発展させながら社会内分業の意義を消極化するか，あるいは，ハイエクのように市場での分知論へとそれを切り縮めてしまうか，三者三様である．しかし，いずれもスミスの分業論の意義を完全に理解しているとはいえないのである．

スミス分業論の全体像は確かに多くの不明確な点を含んでいる．だが，われわれは，そうした部分を切り落としてしまうのではなく，その全体像からより豊かなインプリケーションを引き出せるように，できるだけ細部を補いつつ，理解しようとしてきた．現代の情報産業の隆盛とインターネット上の分業と協業の新たな形態の出現は，経済学の端緒となったスミス分業論の見直しをわれわれに要求していると考えられるからである．

〈注〉

1) フリーソフトウェアに関する筆者の見解は西部（2000）を参照されたい．なお，インターネットや情報通信が日本経済や資本主義経済にいかなるインパクトを持つかについては池田（1997，1999）が参考になる．

2) 以下，スミス『国富論』第一巻，訳書(1)からの引用は原書と訳書のページのみを記す．訳文は適宜変更してある．「dexterity」は，器用さ，機敏さを意味するが，ここでは，より一般的な意味にとり「技能」と訳した．

3) これに対して，宮澤和敏（1993）は，第2章と第3章を，スミスにおける二種類の市場，すなわち「内生的市場」と「外生的市場」に関する議論であると整理している．しかし，われわれは，先に説明したように，第3章における海運や外国貿易に基づくヨーロッパ型を「外発的市場」，内陸航行に基づくエジプト，インド，中国を「内発的市場」と呼び，それら両方と「社会内分業」を区別するべきだと考える．

〈参考文献〉

Hayek, F. A.（1937）"Economics and Knowledge", *Economica*, Vol.IV, in Hayek（1948）.

Hayek, F. A.（1945）"The Use of Knowledge in Society", *American Economic Review*, Vol.35, No.4, in Hayek（1948）.

Hayek, F. A.（1946）"The Meaning of Competition", The Stafford Little Lecture, in Hayek（1948）.

Hayek, F. A.（1948）*Individualism and Economic Order*, George Routledge & Sons（嘉治元郎，嘉治佐代訳『個人主義と経済秩序』春秋社，1990年）

Hayek, F. A.（1968）"Competition as a Discovery Process", in Hayek（1978）.

Hayek, F. A.（1978）*New Studies in Philosophy, Politics, Economics and the History of Ideas*, The University of Chicago Press.

Kirzner, I.（1985）*Discovery and the Capitalist Process*, The University of Chicago Press.

Kirzner, I.（1989）*Discovery, Capitalism and Distributive Justice*, Basil Blackwell.

Kirzner, I.（1992）*The Meaning of Market Process: Essays in the Development of Modern Austrian Economics*, Routledge.

Lavoie, D.（1985a）*Rivalry and Central Planning: The Socialist Calculation Debate Reconsidered*, Cambridge University Press.

Lavoie, D.（1985b）*Natinal Economic Planning: What is left?*, Ballinger Publishing.

Lavoie, D.（1986）"The Market as a Procedure for Discovery and Conveyance of Inarticurate Knowledge", Comparative Economic Studies 28(1).

Marx, K.（1976a）*Ökonomische Manuskripte 1857/58*, Teil 1, in *Marx-Engels Gesamtausgabe*, II-1, 1976（資本論草稿集翻訳委員会『1857-58年の経済学草稿』資本論草稿集1，2，大月書店，1981年）

Marx, K.（1976b）*Zür Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863)*, Teil 1, in *Marx-Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, II-3, 1976-1982（資本論草稿集翻訳委員会『経済学批判（1861-1863年草稿）』資本論草稿集4～9，大月書店，1978-1994年）

Marx, K.（1962）*Das Kapital*, Bd. I, II, III: *Marx-Engels Werke*, Bd.23, Dietz Verlarg,（岡崎次郎訳『資本論』(1)～(9)，国民文庫，1972-1975）

Mises, L. von（1949）*Human Action: A Treatise on Economics*, Yale University Press.（村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社，1991年）

Polanyi, M. (1958) *Personal Knowledge: Towards a Post-Critical Philosophy*, Chicago University Press.（長尾史郎訳『個人的知識』ハーベスト社，1985年）

Polanyi, M. (1966) *The Tacit Dimension*, Routledge & Kegan Paul.（佐藤敬三訳『暗黙知の次元～言語から非言語へ』紀伊国屋書店，1980年）

Ricardo, D. (1951) *On the Principles of Political Economy, and Taxation*, ed. P. Sraffa, Cambridge University Press（堀経夫訳『経済学および課税の原理』雄松堂書店，1972年）

Smith, A. (1976) *The Theory of Moral Sentiments*, eds. D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford University Press（水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房，1985年）

Smith, A. (1950) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 6th, ed. E. Canan, Methuen（大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』(1)～(5)，岩波文庫，1959年）

池田信夫（1997）『情報通信革命と日本企業』NTT 出版.

池田信夫（1999）『インターネット資本主義革命』NTT 出版.

伊藤誠（1990）「スミス分業論の現代的意義」『経済学論集』（東京大学）第56巻第 4 号.

大河内一男（1979）『アダム・スミス』人類の知的遺産42，講談社.

小幡道昭（1990）「スミスにおける市場と歴史－マルクスのスミス批判－」『経済学論集』（東京大学）第56巻第 4 号.

小幡道昭（1997）「協業と分業」『経済学論集』東京大学経済学会，Vol.63，No. 2 .

鈴木信雄（1992）『アダム・スミスの知識＝社会哲学』名古屋大学出版会.

西部忠（1996）『市場像の系譜学』東洋経済新報社.

西部忠（1998a）「多層分散型市場の理論－不可逆時間，切り離し機構，価格・数量調整－」『進化経済学論集』 2 号.

西部忠（1998b）「資本主義の強さとは何か？ －所有権・インセンティヴ・技術革新－」『比較経済体制研究』 5，3-20，1998年 4 月.

西部忠（2000）「コミュニケーションとしての貨幣」『アステイオン』53，TBS ブリタニカ.

星野彰男（1994）『市場社会の体系－ヒュームとスミス－』新評論.

松原隆一郎（1990）「スミスにおける競争と倫理」『経済学論集』（東京大学）第56巻第 4 号.

宮澤和敏「アダム・スミスにおける社会内分業の動的形成過程」伊藤誠・小幡道昭編『市場経済の学史的検討』社会評論社，1993.